

■ フォト・エッセイ ■

ベトナム タインホア省で 出会った人々

写真文
寺本 実
Minoru Teramoto



夫妻で。夫は傷病兵。訪問時にちょうど昼時で心尽くしの料理をごちそうになった

ベトナムの中部北方地域に位置するタインホア省は、山・デルタ・海岸線・島といった多様な自然条件に恵まれることから、ベトナム人識者のなかにはベトナムを縮小したようだと、との声もある。

歴史的には、同省を縦に貫く大河・マー河の畔ドンソンでフランス極東学院が一九二四年に実施した調査により、銅鼓など、後にドンソン文化と呼ばれる初期鉄器文化の遺物が見つかった。さらに、ベトナムを支配していた大国・明を駆逐し、レー朝（一四二八～一七八九年）の礎を築いたレー・ロイは同省ラムソンの出身であり、同地で挙兵している。

二〇〇七年一〇月、こうした地理的、歴史的条件を持つタインホア省のN県（県）は日本でいえば「郡」に相当する）に位置するある村を、障害者の生計調査のために訪れた。同村には同県の中心地から勾配のある土道をバイクで二〇分ほど走ると辿り着く。視界が開けると黄金色に色づいた稲田が広がり、遠く周囲には山々が連なっていた。そこで出会った人々のことを少し紹介したい。

ホンさんは三〇代半ばの男性。自転車修理業を営む。下肢が不自由なホンさんは修理技術を独学で学んだ。職歴は二〇年を超えて作った。場所は村役場から少し離れた丘の中腹にある。辺りに民家はない。家庭の事情により一人で暮らすホンさんにとつ



勾配のある土道を抜けると稲田が姿を現す

村の自転車修理屋さん。独学で技術を身につけた。
キャリア20年超のベテランだ



母子。少女の希望は学校に通うこと

て、何かあった際には友人が頼りだ。心配なのは「すべて一人でやらなければならない」状況、そして病気。移動のための動力付きの車も必要だと考えている。経済的安定と健康を願っている。

ソアンさんは一〇代半ばの女性。大工の父、農業に従事する母、小学生の弟二人と暮らす。水頭症の彼女は学校に通っていない。少し前に頭痛、お会いした時点では手足に痛みがあるとのことだった。ソアンさんの母の姉は枯葉剤被災者に認定されている。家で一日を過ごすソアンさんはテレビを観るのが好きである。心配なのは両親が年老いた後、誰もケアしてくれる人がいないこと。学校に通い、職業技術を身につけることを願っている。

ニャンさんは一〇代後半の男性。母、末の弟、の三人で暮らす。学校には通っていない。父とすぐ下の弟はホーチミン市にいる。父方の祖父はベトナム戦争に参加し枯葉剤に被災した。母親が心配しているのは両親が老いた後、障害を持つニャンさんを誰が養護するのかということ。そして、治療を願っている。

オンさんは五〇代前半の男性。行政村の下に位置するムラの長を務めていた。病気で消化器系の内臓疾患を抱えていた。農業に従事する妻との間に三人の子どもがいる。政治社会組織のひとつである退役兵士の会の幹部も務めており、忙しい。心配なのは自らの健康状態。傷病査定の見直しを願って



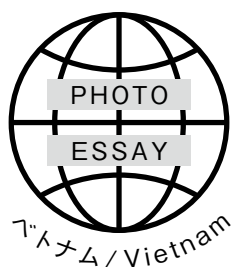
母子。息子さんは枯葉剤被災者に認定されている



高床式住居に暮らすムオン族の男性。両脚の自由は利かないが魚網の制作に従事。枯葉剤被災者の認定手続きを進めていた



晴天が続いたが、所々で道がぬかるんでいた



いる。

ターイさんは六〇代半ばの男性。妻、二人の娘の四人で暮らす。ほかの四人の子供はそれぞれ独立、うち二人はホーチミン市にいる。夫妻は農業を営むが、実際には奥さんが切り盛りしている。ターイさんはベトナム戦争中に南部東方地域で戦闘に参加し、枯葉剤に被災した。二〇代の娘二人も被災者と認定されている。心配なのは娘の健康と自らが身罷った後の生活。娘が支援を受けられるよう願っている。

ボンさんは少数民族ムオン族出身の五〇代後半の男性。母、兄嫁、甥夫婦とその子供と共に高床式住居で暮らす。魚網の作成が仕事で、一五日かけてひとつの網を編む。ベトナム戦争では中部北方地域で戦闘に参加した。戦地から帰郷後に背中、両脚に異常が出、歩行困難になった。枯葉剤被災者の認定を申請中であつた。心配なのは老後の生活。脚の治癒を願っている。

タップさんは五〇代前半の男性。ベトナム戦争中、枯葉剤に被災した。妻と次男の三人で暮らす。顔面が痙攣した状態が続く。移動は容易でなく一日を家で過ごす。妻が農業に従事する。次男のほか子供が三人。二人の娘のうち一人はタップさんと同じ症状で死亡した。心配なのは子供の仕事のこと。子供が仕事を持てることを願っている。トゥエットさんは少数民族ターイ族の三〇代後半の男性。枯葉剤被災者である。妻と学校に通う子供と二人で暮らす。現在



リズムカルに小気味いい音を響かせる村の鍛冶屋さん



家族で。父親と娘さん2人は枯葉剤被災者に認定されている



ビンザン（平民食堂）からの一望

住む家は国の支援を受けて建てられた。トゥエットさんは五人兄弟で末の妹も枯葉剤被災者と認定されている。料理など家事を主に行い、妻が農業に従事する。心配なのは体が弱いこと。少しでも罹病が減ることを願っている。

クオンさんは三〇代前半の男性。キリスト教徒で農業を営む母と二人で暮らす。枯葉剤被災者と認定されている。消息不明の父親が枯葉剤に被災していたと考えられている。家の床に座り、四角柱の木片を手にして一日を過ごす。「今心配なことは」との問いに母親は沈黙を守った。母親はキリスト教神父の訪問を願っている。

クイさんは一〇代後半の男性。両親、兄妹と暮らしている。重度の脳性まひで枯葉剤被災者と認定されている。父はベトナム戦争中、南部東方地域で戦闘に参加し、枯葉剤に被災した。クイさんは一日を家のベッドで過ごす。両親が心配なのは、日増しに弱くなるクイさんの体のことと、自らが老いた後のクイさんの養護の問題。国からの扶助金の増額を願っている。

ビックさんは中学に通う一〇代の女性。脚が不自由であるが、ゆっくりと歩くことはできる。両親、祖母、兄と暮らす。友人が多く、何かあった場合には助けてくれる。心配なのは将来の仕事のこと。目下、学業の継続を望んでいる。現状では移動に使える「車」があればと願っている。

（てらもと みのも／アジア経済研究所地域研究センター）